

ディベートにおけるメタ言語表現

—日本語学習者の場合—

大塚 容子

Metalingual Expressions Used in the Context of Debate

—By Non-native Speakers of Japanese—

Yoko Otsuka

Abstract

The aim of this paper is to show how intermediate and advanced learners of the Japanese language use metalingual expressions in a debate.

First, we would like to show how metalingual expressions are used in both spoken and written language of Japanese, and to clarify them in terms of function. Next, we will discuss whether or not metalingual expressions used in a debate by learners of the Japanese language are effective, through showing how many metalingual expressions are uttered in a debate, and how they are functioning. And finally we will examine some problems when we make use of a debate in a classroom situation for improving speaking skills of learners of the Japanese language.

Key words

metalingual expression, debate, discourse, structure, organization

はじめに

日本語教育では、教授法の変遷に伴い、日常生活に必要なコミュニケーション能力を養うために、さまざまなタイプの練習が開発されている。文型練習、談話練習、コミュニケーション・ギャップを利用した練習、ロールプレイ、タスク活動などである。文型練習は、文脈から切り離して取り出された文型の形式を習得することを主目的としている。談話練習やロールプレイなどでは、文型は一つのコミュニケーション活動の一部に位置付けられる。その文型がどのような状況で用いられるかを提示し、円滑なコミュニケーションを行うために必要なストラテジーの習得を目指している。このような総合的な練習を積み重ねてきた学習者が、中・上級レベルになって、専門的内容について自分の意見を述べたり、学習者同士で議論したりする活動を行うと、相手にわかりやすく自分の考えを伝えることができないということがよくある。このような学習者に対する、発話能力を高めるための練習方法の一つとしてディベートを挙げることができる（二村・駒田・大塚（1994））。

学習者のディベートにおける発話は、論点が明確なものから、どの点について反対しているの

かもよく理解できないものまであり、学習者間にかなり個人差が見られる。わかりにくさを生み出す原因としてまず考えられるのは、発話内容の述べ方そのものの問題である。例えば、発音が悪い、文法的誤りが多いなどといった問題である。しかし、一文一文が文法的に適切であったからといって、それが必ずしも論旨が明確な発話になるわけではない。意見の相違を明確にしながら論理的に自分の意見を述べるのが要求されるディベート活動では、どのような順番に述べるのか、どの点に対して反対するのか、最も主張したいことは何なのかを明示する必要がある。それは、例えば、「○○さんは～～とおっしゃいましたが」とか「○○さんの意見に対して、反対の意見を述べたいと思います」などのメタ言語表現となって現われる。

そこで、本稿では、ディベートを「ある論題に対して、定められたルールに従って、肯定派・否定派の間で行われる討論」(二村・駒田・大塚(1994:61))と定義する。そして、中・上級の日本語学習者の発話能力を高めるための練習の一つとして行ったディベート活動で、学習者が使用したメタ言語表現の実態を明らかにする。まず、メタ言語表現について考え、考察の対象となる発話資料について説明する。次に、学習者の使用したメタ言語表現を量的、機能的に分析する。最後に、日本語教育への応用を考える。

なお、本稿では、メタ言語を「言語について語る言語」(田野村(1996:11))とし、以降、「メタ言語表現」という用語を用いることとする。ここで分析の対象とするメタ言語表現は第2節で改めて限定する。また、学習者の発話は誤用が認められても、修正を加えず提示する。

1. メタ言語表現の機能と分類

日本語のメタ言語表現の研究として、まず、杉戸・塚田(1991)を挙げることができる。杉戸・塚田は、メタ言語表現を「言語行動について言及し、それ自体が言語表現をとまなう言語行動」(p.133)とし、メタ言語表現の使用動機という観点から、メタ言語表現を3種類に分類している。すなわち、①表現の内容とその伝達の過程の調整に配慮したメタ言語表現、②人間関係の調整に配慮したメタ言語表現、③言語生活上の規範に配慮したメタ言語表現である。そして、月刊雑誌『言語生活』の巻頭論文400編の中に現われたメタ言語表現を抽出、メタ言語表現に用いられた動詞を分析して、以下のような五つの表現類型にまとめている。

(1) メタ言語表現の五つの表現類型(杉戸・塚田(1991:147,153))

- a. そこで扱おうとする話題内容に明示的に言及する表現
- b. 論文の文章としての流れや構成にかかわる言語行動に言及する表現
- c. 文章を構成する作業の単位としての言語行動に言及する表現
- d. 作業単位を含む論文構成への言及
- e. 読者や関係者への対人的配慮としての〈あいさつ〉的な言語行動についての言及

使用動機との関連で眺めると、(1a)～(1d)は前述の①の動機から生まれたものであり、(1e)は②の動機から生じたものである。巻頭論文では、その性質上、③の動機のメタ言語表現は現われにくいと言えよう。

杉戸・塚田の研究を踏まえて、古別府(1994)は日本語教育の観点からメタ言語表現の研究を行っている。古別府は、日本語学習者(日本の大学の留学生)と日本語母語話者が研究報告場面の口頭発表で用いるメタ言語表現の使用実態を示し、比較検討している。分析対象とした表現は「研究報告場面での口頭発表において、発表時に、発表者が、進行上、用いるメタ言語表現(自

分がこれから言うこと、言ったことに言及する表現)で、「言う」、「説明する」などの口に出して言うことを直接に示す言葉及び、「分析する」、「検討する」のように言語行動についてはっきりと明示する言葉を含む表現」(p. 103)である。そして、口頭発表におけるメタ言語表現には、伝達過程調整と対人関係調整に関わるものがあるとして、7種の機能を提示した。すなわち、(a)主題化、(b)論点化、(c)行動表示、(d)流れ表示、(e)ことわり、(f)言い淀み、(g)儀礼である。(a)～(d)は伝達過程調整に、(e)～(g)は対人関係調整に関わるものである。伝達過程調整は杉戸・塚田(1991)の動機①に、対人関係調整は動機②に対応するものと考えられる。

さらに、メタ言語表現を談話の構造化という観点から研究したものとして、西条(1996, 1999)が挙げられる。西条(1996)は、杉戸・塚田(1991)、古別府(1994)の研究を踏まえ、日本人(日本語母語話者)がディベートで用いたメタ言語表現の機能を、(ア)話題の提示、(イ)焦点化、(ウ)総括、(エ)ナンバリング、(オ)補正、(カ)表現の検索、(キ)宣言、の7種に分類している。(オ)～(キ)は古別府の(e)～(g)にあたる。(ア)～(エ)と(a)～(d)には微妙な違いが見られる。特徴的なのは、(ウ)総括である。これは、話し手がある程度準備してきた原稿を一方的に伝達する口頭発表という活動と、相手の意見を聞きながら自分の意見をまとめていかなければならないディベート活動との違いが関係していると考えられる。しかし、さらに重要なのは、メタ言語表現に対する定義の違いである。西条(1996)は、談話から取り出されたメタ言語表現にではなく、談話の構造化におけるメタ言語表現の機能に焦点を当てているため、「評価の部分を含めてメタ言語と考え」(p. 70)ている。従って、「総括」には自己の発話に対する評価も含まれている。

2. 調 査

2-1. 資料

発話練習の一環として実施されたディベート(約1時間)での、日本語学習者による発話が資料の源である。ディベートを録音し、文字化したものを資料とする。

2-2. 日本語学習者

このディベートに参加したのは、南山大学留学生別科準上級コース(1993年1月～5月)の学習者のうち、以下の13名である。以下に学習者の属性をディベートでの発話順に示す。

(2) 日本語学習者の属性

学習者	性別	国 籍	母 語
A	男性	フィリピン	タガログ語
B	男性	アメリカ	英語
C	男性	中国	中国語
D	男性	アメリカ	英語
E	女性	アメリカ	英語
F	女性	アメリカ	英語
G	男性	オーストラリア	英語

学習者	性別	国籍	母語
H	女性	アメリカ	英語
I	女性	アメリカ	英語
J	男性	中国	中国語
K	男性	インドネシア	インドネシア語
L	男性	アメリカ	英語
M	女性	アメリカ	英語

2-3. 日本語コースにおけるディベート活動の位置づけ

準上級コースは、一日の授業時間180分、週5日、15週間のコースである。読解教材（『朝日新聞で日本を読む』伊藤博子他著、くろしお出版）を主教材として、読解力の養成と同時に、話す・書く・聞く力を偏りなく養成することを目的としている。調査資料となるディベートは、話す力を養成するための練習の一つとして行ったものであるため、教育的効果を考え、以下に示すような独自のルールが設けられている。

(3) 発話練習用ディベートのルール（二村・駒田・大塚（1994：61-2））

- a. 学生の一人（または二人）を議長及び審査委員とする。
- b. 残りの学生を二つに分け肯定側・否定側にする。
- c. 論題について予め争点①～⑤を決めておく。
- d. 進行方法はフォーマットに従う。

フォーマットを以下に示す（（ ）は時間（分）を表わす）。争点の数はクラスの人数によって変動する。

(4) ディベートフォーマット

肯定側概要スピーチ	(4)
質疑応答	(3)
否定側概要スピーチ	(4)
質疑応答	(3)
肯定側争点①スピーチ	(3)
質疑応答	(1)
否定側争点①スピーチ	(3)
質疑応答	(1)
肯定側争点②スピーチ	(3)
質疑応答	(1)
否定側争点②スピーチ	(3)
質疑応答	(1)
・	
・	
肯定側争点⑤スピーチ	(3)
質疑応答	(1)
否定側争点⑤スピーチ	(3)

質疑応答	(1)
グループで相談	(5)
否定側結論	(4)
肯定側結論	(4)
審査員判定	

2-4. ディベート実施手順

まず、コース第4週目にディベートによる発話練習を実施した。コースで初めての試みであったため、学習者の発話に様々な問題があることが明らかになった。スピーチに関する問題として、制限時間内にまとめることができない、スピーチのわかりやすさに個人差があることが挙げられた。また、質疑応答が効果的にできないという問題が存在することも明らかになった。ディベートでは、相手の主張をよく聞いて問題点を明らかにし、その上で自分の意見をまとめ、反論していくことが必要となる。そこで、2回目のディベートを行う前に、効果的な質問の仕方として、次のような表現練習を行った。(ディベート実施手順に関する詳細は、二村・駒田・大塚(1994)参照)

(5) 効果的な質問をするための表現練習

- a. あの、～についてなんですが(トピックの提示)
- b. ～とおっしゃいましたが(確認)
- c. どういうことかもう少し説明していただけませんか。
～と思うんですが、いかがでしょうか。(質問)

これらの表現は、効果的な質問の仕方として提示したが、反論スピーチを行う時にも利用できるものである。

調査資料となるディベートは、このような練習を実施した後、コース第10週目(1993年3月31日)に行われたもので、テーマは「酒の自動販売機の是非」である。争点は、「価格・便利さ」、「購入者」、「酒屋との関係」、「アルコール中毒」の4点である。テーマも争点も学習者の話し合いにより決定された。学習者がどちらの側に属すかは、学習者自身の意見とは関係なく、くじ引きで決められた。

3. 日本語学習者によるディベートでのメタ言語表現

3-1. メタ言語表現の限定

日本語学習者の発話の場合、必ずしもメタ言語表現が完全な形で現われるわけではない。そこで分析対象とするメタ言語表現は、西条(1999)に従い、「談話において、自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことに言及する表現」とし、動詞の形で表現されていなくても、発話内容や発話行動に言及しようとするものはすべて含めることとする。従って、話題の転換や順序を表わす接続詞や副詞が単独で用いられているもの⁽¹⁾も対象とする。

3-2. メタ言語表現の分類

第1節で述べた先行研究を参考に、学習者が用いたメタ言語表現を次のように分類する。

(6) 学習者が用いたメタ言語表現の機能分類

- a. 話題の提示 話題を提示するためのメタ言語表現
 発話例：お酒，アルコールの自動販売機がいいかどうかということですね，
 なぜ酒屋さんが困るかと言うと，
- b-1. 他者発話焦点化 相手側の話し手の発話を取り上げて，それに基づいて話題を
 展開していくためのメタ言語表現
 発話例：〇〇さんは自動販売機の値段は便利だと言ったけど，
 〇〇さんはビールのほうが良いと言っていましたけど，
- b-2. 自己発話焦点化 自己，あるいは自己と同一側の話し手の発話を取り上げて，
 それに基づいて話題を展開していくためのメタ言語表現
 発話例：〇〇さんが言ったとおりで，
 〇〇さんがおっしゃったことと同じです。
- c. 流れ表示 談話の流れや構成を表わすためのメタ言語表現
 発話例：話は少し変わりますが，
 まず，二番目，最後，以上です。
- d. 作業表示 談話を構成する要素としての作業を表わすためのメタ言語
 表現
 発話例：適当なところで，具体的に，あの，例もあげたいと思います。
 以上をまとめますと，
- e. 宣言 談話の構成に関係なく，自分がこれから行おうとする言語
 行動を宣言するためのメタ言語表現
 発話例：じゃ，質問します。
 今，ちょっとアンケートします。

(6 a)～(6 d)は，伝達過程調整に関わるものである。(6 e)は相手に働きかけるものである
 ので，対人関係調整と考える。

3-3. メタ言語表現使用の実態

3-3-1. 量的分析

各々の学習者のメタ言語表現使用数を以下に示す。○は肯定側であることを表わし，学習者M
 は審査員である。「質疑応答」は質疑応答のセッションに用いられたメタ言語表現の総数である。

(7) 学習者のメタ言語表現使用

学習者	話題の提示	他者焦点化	自己焦点化	流れ表示	作業表示	宣言	合計
A○	2	0	0	5	4	0	11
B	1	2	0	4	0	0	7
C○	1	1	0	7	2	1	12
D	2	5	0	0	0	1	8
E○	0	0	1	1	0	0	2
F	0	1	0	3	0	0	4
G○	0	1	1	0	0	0	2
H	0	0	0	1	0	0	1

学習者	話題の提示	他者焦点化	自己焦点化	流れ表示	作業表示	宣言	合計
I○	0	0	0	3	1	0	4
J	0	1	0	0	2	0	3
K	1	0	0	5	4	0	10
L○	2	2	0	1	0	0	5
M	2	4	0	1	0	1	8
質疑応答	2	6	1	0	1	4	14
合計	13	23	3	31	14	7	91

メタ言語表現の使用数は学習者間でかなり個人差が見られる。10個以上使用する学習者もいれば、1個しか使用しない学習者もいる。使用個数の多いメタ言語表現は、一番が流れ表示、次に他者焦点化である。

3-3-2. 機能別分析

メタ言語表現の機能別に使用の実態を見ていく。

〈話題提示〉

2回目のディベートを実施するために、トピックの提示方法として「～についてなのですが」という表現を練習したが、この表現は全く使用されていない。このような前置き表現を用いて話題を提示するのではなく、次のような名詞文で提示するか、単に「～について」という形式で話題を提示している。

- (8) a. 私の課題はお酒の自動販売機についてだけです。
- b. 私のテーマはアルコール中毒についてです。

〈他者発話焦点化〉

他者発話焦点化は、肯定側スピーチよりも否定側スピーチで数多く用いられている。肯定側の主張に焦点を当て、反対スピーチを行うからである。また、質疑応答のセッションでも、他者焦点化は行われている。

(9) 反対側スピーチで使用された他者発話焦点化の例

- a. 文化の違いがあるから、みんなは自動販売機で買えないと言ったんですけど、
- b. ○○さんは外はとても汚いと言っていましたけど、
- c. ○○さんはもっともらしい意見を述べた。でも、
- d. ○○さんが自動販売機が高いと言った。電気が高い。でも、実は、

従属節を使用する学習者もいれば、接続詞を使用する学習者もいる。また、敬語は用いられていない。

(10) 質疑応答で使用された他者発話焦点化の例

- a. 自動販売機は日本の酒ばかり売ると言いましたけれど、どうしてそう思いますか。
- b. ○○さんはビールのほうが良いと言っていましたけど、ビール、バーが好きじゃない人はどうでしょうか。

〈自己発話焦点化〉

(6 b-2)で示したように、話し手と同一側の、他の話し手の発話内容を焦点化している。他者発話焦点化では見られなかった敬語が使用されている。

〈流れ表示〉

流れ表示のメタ言語表現の使用回数が比較的多いのは、学習者A, B, C, Kである。学習者A, Bは、各々肯定側、否定側の概要スピーチを行い、ディベート全体の流れを説明する時にメタ言語表現を用いている。学習者Kは、否定側結論を述べる役割を担っており、各々の争点について、反対意見を述べる時に用いている。

(11) a. 学習者A (肯定側概要スピーチ)

これから私のグループのメンバーたちは、あの、一人一人、この次の四つの項目を説明していきたいと思います。一番は～～。二番は～～。三番は～～。四番は～～。

b. 学習者B (反対側概要スピーチ)

あの、酒の自動販売機はちょっとだめだと思います。(中略)次は、～～。次は～～。次は～～。最後は～～。

c. 学習者K (反対側結論)

うちのグループの結論が、あの、酒の自動販売機はもちろん、反対です。賛成じゃないです。なぜかという、ま、あのう、最初からまとめましょう。一番目は～～。二番目。～～。で、三番目。～～。ええっと、最後、～～。

学習者Cが流れ表示に用いたメタ言語表現7回のうち5回は、「あと」、「あとね」で、次から次に話を繋ぐために用いたもので、「化石化」されているようである。

〈作業表示〉

(6 d) で例示しなかったものとして、「なぜかと言うと」がある。「その理由を説明すると」という意味を表わすものと考え、作業表示とした。これは学習者Kが、反対側結論で3回用いている。各々の争点に対する反対側の主張を述べ、その理由を説明している。

(12) 一番目は値段と便利。で、酒の自動販売機は便利じゃない。なぜかと言うと、日本では、～～。

また、直前の単語を英語で言い換える時に使用されたメタ言語表現が、ディベート全体を通して4例あった。発話内の単語が聞き手に正しく理解されていないと話し手が判断した場合に、伝達内容を明確にするために英語に言い換えているものである。

(13) a. 識別力、英語で言うと、discrimination、がないということになりますね。

b. 医学の本によれば、お酒を飲んでから数時間あと、血、英語でblood、血の中に、～～。

〈宣言〉

(6 e) で例示したとおりである。

4. 考 察

まず、一般的傾向として、研究報告の口頭発表場面における研究(古別府(1994))では、日本語学習者は日本語母語話者に比べて使用するメタ言語表現の種類も数も少ないということが報告されている。日本語母語話者によるディベートにおけるメタ言語表現の調査(西条(1996))と本稿の調査を比較してみると、やはり日本語学習者のメタ言語表現の種類は少ないことがわかる。日本語学習者の問題点を順に見ていく。

まず、伝達過程調整に関するメタ言語表現について考える。この中で使用数の最も多かったのは、「流れ表示」である。しかしながら、使用は概要スピーチ、あるいは結論を述べた学習者に集

中している。争点を列挙する、争点に関する結論を順に述べるといのはどの言語にも見られる現象であり、日本語固有のものではないであろう。その意味で、学習者にとっては使いやすいメタ言語表現であろう。

次に使用数の多かったのは、「他者発話焦点化」である。「～と言いました（おっしゃいました）が、」という表現は、相手の発話の一部に焦点を当て、反論していくストラテジーとして学習者には理解しやすいであろう。「～と言いました」という文型は初級で学習しており、文法的難しさもない。しかし、ディベートで問題になるのは、後続する反論部分である。根拠を示しながら反論しなければならないのである。次の学習者のように、相手の発言をとらえて、ただ反対するだけでは効果的なスピーチはできない。

- (14) 自動販売機の値段とバーの値段は差があるから、自動販売機はいいとあなたが言った。でも、もし、アルコールが飲みたかったら、バーで雰囲気があるから、もちろん、あの、道でビールが飲みたくないでしょう。差別がないからいいと言われた。でも、ほんとうに、あの、差別はないけど、あの、21歳以下の人を買えるから、ちょっと、あの、無理です。

これは、反論のきっかけを作る他者発話焦点化のメタ言語表現をストラテジーとして学習者に提示しても、それが効果的なスピーチにはつながらないことを示している。効果的な反論スピーチを行うためには、西条(1996)が指摘しているように、スピーチを「構造化」する必要がある。それは、発話練習の中に収まる問題ではなく、談話、あるいは文章の構成に関わる問題であると思われる。読解、作文の授業の中で、構成を意識した練習が必要であろう。談話・文章構成力を養成しない限り、ディベート練習を何回繰り返しても効果的な反論スピーチを行うことはできないであろう。

伝達過程調整に関わるメタ言語表現の中で、比較的使用回数の少ない、「作業表示」と「話題提示」について検討したい。学習者が使用した「作業表示」のメタ言語表現の種類は「例示」、「まとめ」、「理由説明」、「英語への言い換え」の4種類である。種類の少なさはおそらく談話の構成と関係があると思われる。事例や理由を羅列するだけのスピーチでは、スピーチの構成要素をメタ言語表現によって明示する必要がない。「流れ表示」のメタ言語表現による接続ができればよいのである。

ディベートにおいて話し手がどんな話題について述べようとしているかを明示することは極めて重要である。今回のディベートでは、学習者が争点とその順番を決めているため、進行は自明のことになっている。そのため、ただ単に「○○について」といった話題の提示が多く見られた。他者発話焦点化のメタ言語表現の使用数が多い事実を見ると、話題の提示のメタ言語表現は、その重要性和方法さえ理解できれば容易に使用できるようになると考えられる。

次に、対人関係調整に関わるメタ言語表現を見ていく。日本語母語話者による研究報告(古別府(1994))やディベート(西条(1996))では、対人関係調整に関わるメタ言語表現が3種類使用されているが、日本語学習者が使用したメタ言語表現は1種類である。日本語学習者が使用したメタ言語表現「宣言」は、聞き手に対して働きかけを行うものであって、聞き手に対して何らかの配慮を表わしているものではない。そこには、このような発言をすると、相手を傷つけたりするかもしれないという配慮はない。メタ言語表現が話し手の談話に対する認識の現われであると仮定すると、このことは二つの可能性を示唆している。一つは、学習者同士には相手への配慮の意識がないということ、もう一つは、配慮はあっても日本語でうまく表現できないということである。「他者発話焦点化」のメタ言語表現において敬語が使用されていないことを考慮に入れる

と、前者の可能性が高いと考えられる。その要因として二つのことが考えられる。一つはディベートという活動がもっている特殊性である。ディベートは学習者自身の生の意見を述べる場ではなく、意図的に賛成側と反対側に分かれて、意見を対立させる、いわば非現実的なゲームの世界である。ディベートに慣れている学習者であれば、意図的に攻撃的に発話することもありうる。そうであれば、相手への配慮は無用である。勝利をおさめることができればよいのである。もう一つは学習者同士の連帯感である。ディベートが発話練習の一環として実施されているため、学習者は日常の授業の一つと捉えている。そのため、改まった場面であるという認識が欠けているかもしれない。また、実施時期がコース開始後第10週目にあたり、学習者間に苦楽を共にした仲間という意識が芽生えていることも影響しているかもしれない。

日本語教育の観点からこの問題を捉えると、通常の教室活動のなかで、改まった話し方の練習場面を設定するのがいかに難しいかということを示している。ディベートによる練習の目的を、論理的に自分の意見を述べる力を養成することと規定すれば、問題はないだろう。しかし、前述したように、ディベートは日常生活の中ではありえないような特殊な状況である。社会生活を営む上では、論理的な話し方ができればいいということではない。発話練習の最終目標を、日本人との接触場面で対立的な意見を述べようとする時、相手を傷つけることなく、いかに相手と対立する意見を述べるかというストラテジーの習得と考える時、聞き手への配慮は不可欠である。また、大塚（1999, 2000）で示したように、日本語母語話者が、討論場面で前置き表現や文末表現を巧みに利用して相手の「Face (面子)」⁽²⁾を脅かさないようにしている事実を鑑みると、対人関係調整に関わるメタ言語表現の学習は極めて重要である。学習者同士の教室場面でいかにフォーマルな雰囲気を作り出し、人間関係を設定するかに工夫が必要である。

終わりに

学習者の多様化に伴い、日本語教育では学習者を中心にしたコミュニカティブな練習が開発されてきた。しかし、中・上級レベルになって、「事実を客観的に説明する、事実に基いて話す、自分の意見を述べる、相手の意見に賛成・反対する、筋道を立てて話す、仮定に基いて話す」（二村・駒田・大塚（1994：60））能力を養成しようとする時、いくつかの表現やストラテジーを習得するだけでは解決できない、大きな問題が現われる。ここで重要なことは、どのように表現するかではなく、何を表現するかだからである。メタ言語表現は、綿密に構築されたスピーチをより効果的に伝える、つまり、構成を聞き手に予告するという意味で効果を発揮する。メタ言語表現の学習の前に、構成を意識化されることのほうが重要である。一つの技能に限定した練習ではなく、内容を重視した、統合的なアプローチが必要であろう。

謝辞

ディベートに参加してくださった南山大学外国人留学生別科1993年春学期J6の学生のみなさん、コース主任であった南山大学人文学部教授坂本正氏に心からお礼申し上げます。

また、本稿は平成12年度岐阜聖徳学園大学研究助成金による研究成果の一部である。

注

- (1) 中右 (1994) は、モダリティを命題内容に関わる S モダリティと、談話領域レベルに関わる D モダリティに分類している。そして、D モダリティをさらに、談話形成のモダリティ、発話様態のモダリティ、情報取り立てのモダリティ、対人関係のモダリティ、感嘆表出・慣行儀礼のモダリティに下位分類している (p. 59)。文の順序づけを表わす接続詞や副詞は談話形成のモダリティに含まれる。これらは談話に対する話し手の態度を表わしているので、メタ言語表現と考える。
- (2) これは、Brown & Levinson (1987) がポライトネスの理論を展開するときに用いた基本的な概念である。人間には「Positive Face (積極的面子)」と「Negative Face (消極的面子)」があるとされる。日本語では、一般的に言うと、消極的面子に配慮したストラテジーが使用される。

参 考 文 献

- 大塚容子 (1999) 「テレビ討論における前置き表現—「ポライトネス」の観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要』第37集 pp. 117-131 岐阜聖徳学園大学
- 大塚容子 (2000) 「テレビ討論における文末表現—「ポライトネス」の観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要』第39集 pp. 113-125 岐阜聖徳学園大学
- 西条美紀 (1996) 「ディベートにおけるメタ言語」『日本語学』第15巻第11号 pp. 68-75 明治書院
- 西条美紀 (1999) 『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- 杉戸清樹・塚田実知代 (1991) 「言語行動を説明する言語表現—専門的文章の場合—」『国立国語研究所 研究報告集』12 pp. 131-164 秀英出版
- 田野村忠温 (1996) 「メタ言語とは何か」『日本語学』第15巻第11号 pp. 11-18 明治書院
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の世界』大修館書店
- 二村直美・駒田朋子・大塚容子 (1994) 「日本語教育における「ディベート」—実施報告と学習活動としての可能性—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』第1号 pp. 58-70 名古屋学院大学
- 古別府ひづる (1994) 「研究報告場面における口頭発表のメタ言語表現—日本人と留学生との比較—」『平成6年度日本語教育学会春季大会 予稿集』pp. 103-108 日本語教育学会
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987(1978)) *Politeness: Some Universals in Language Usage* (reissued). Cambridge: Cambridge University Press.